

## 小説同人誌評 35

### 文校の先達たち

#### 細見和之

相変わらずロシアによるウクライナ侵攻が

続いているが、ウクライナ側の反転攻勢によって、ロシア軍の撤退が報道されている段階である。しかし、ロシア側の窮状がかえって核兵器の使用を促してしまうのではないかと気が気でない。そうなると、ウクライナは全面的に、ロシアとNATOの代理戦争の舞台と化してしまう。そのうえ、核を用いた第三次世界大戦の可能性までもが現実味を帯びてしまう。その流れは仮にプーチンの失脚があっても収まらないかもしれない。プーチンの失脚のあとでさらなる強硬派がロシアを牛耳るかもしれないからだ。一方で一市民としてできることを模索しながら、私たちは私たちの文学を継続するしかないのだ。

まさしくそういう「私たちの文学」を頼もしくも体現してくれているのが、宇多しげきの編集している『イルカと錨』第2期1号だ。宇多しげきというと、河瀬直美監督の映画

『殯(もがり)の森』で「新人」として主演男優を務めた「うだしげき」として世間的には知られているだろう。しかし、宇多は一九七二年に大阪文学学校に入学し、その後編集者として仕事をしながら、小説の執筆なども続けていたのだ。『殯の森』の時点では奈良県在住だったが、いまは沖縄の離島に暮らしながら彫刻家・金城実の自伝に関わる仕事に没頭しているという。金城実もまた大阪文学学校でしばしば講演をしていたはずだ。

その『イルカと錨』第2期1号では巻頭に早野貢司「一人の会の新聞」が掲載されていた。日付とともに亡き妻への回想を軸にした短文が第一号から第四十九号まで綴られている。第百号までの予定ということだ。

早野も大阪文学学校に宇多と同期で入学していた身で、こちらは一九八五年に「朝鮮人街道」という作品で「文藝界新人賞」を獲得した。しかし、その受賞式に向かう途中に脳梗塞で倒れてしまうのである。私自身、一九八五年に大阪文学学校に入学したところだったので、早野の受賞と脳梗塞のことはよく覚えていて、一命はとりとめたものの、右半身不随と失語症に悩まされる生活を、教職にあつた妻に支えられ、左手で文字を綴ることをはじめた。けれども、その妻も二〇一六年に他界してしまつたのだ。その妻に語りかける文章の数々。ある意味これは文学の原点

の原点だ。一九七〇年代の文学学校の光景も垣間見られるので、是非一読を勧めたい。同誌掲載の、関幸壽「橋のむこう」は、小学校五、六年の「茂」を主人公に、思春期のはじまりをしつとりと描いている。

茂は「ジンゾウエン」(腎臓炎)と診断され、しばらく学校を休んで自宅療養することになる。それはとうとう四ヶ月におよんだ。茂は自慰をおぼえはじめていて、罪悪感とともにそれが自分の病気の原因のようにも思っている。両親はすでに結核で亡くなつていて、茂は祖母に育てられているという設定で、学校を休んでいるあいだ「カオル」という名の若い女性が住み込みで世話をしてくれる。祖母との関係もさることながら、カオルとのほのかな交情が作品に奥行をあたえている。

同誌に掲載の、宇多しげき「レイルウエイ風のむこう」で、宇多自身は生まれてから八歳までの自分の生い立ちを、年代ごとに綴っている。おそらくは事実にもとづく記述と思われる。幼年時代の記憶に宇多はいま、ずいぶん拘っているようだ。幼い「ボク」が貧しい生活のなかで、数々の「仕事」をこなしていたことに驚く(この作品は「冬の河鹿」第五部とも題されていて、以前の第一部から第四部までとあわせて考えるべきなのだが、いまはその余裕がなく作者に申し訳なく思う)。それとこれは早野の作品にもよく現われて

いることだが、この世代（宇多は一九四六年、早野は一九四八年の生まれ）にとつての映画の大きさをあらためて感じた。テレビが家庭に普及するまえで、映画の上映に接することが彼ら、彼女らの想像力を大いに刺激したのだ。その点からすると、宇多が俳優として成功した原点も、このあたりにあるのかもしれない。宇多自身は俳優としての自分のことはあまり語りたがっていないようでもあるが……

ここまで、もつぱら『イルカと錨』について記してきたが、今回、それだけの一冊が私にとって印象深かったということでも了解していただきたい。

というふうに、大阪文学学校の昔の修了生の現在に思いを馳せていると、『革』第37号には、小野進一「詩人Kの痕跡―晒される者の挽歌―」が掲載されている。小野もまた一九七〇年から一九七七年初頭まで開講していた京都文学学校の出身者で、その京都文学学校ではじめて出会った「京都の詩人K」との晩年にはいたるまでの深い交流を印象深く綴っている。

あくまで「詩人K」と表現されていて、Kと出会う主人公も「河原進」と名づけられているのだから、これをそのまま事実と読むのは間違いかもしれない。しかし、Kの詩集として『不安のうた』と『遊行する魚』があげられて、そこから繰り返し引用もされている

ので、「詩人K」が「蒔田耕一」を指しているとして作者は綴っているだろう。

第一詩集『不安のうた』が一九八七年に刊行された際、大阪文学学校である種の畏敬の念をもって蒔田について語られていたのをおぼえている。それから約二〇年後の二〇〇六年に詩集『遊行する魚』が出版されたときには、作者の自死のニュースとセットだった。しかし、蒔田の死について、深く語られることはなかったように思う。

それからじつに十数年の時を隔てて、作者の手によつて、蒔田の娘夫婦の壮絶な死とともに、「詩人K」、蒔田耕一がどのように生き、どのように死んでいったのかがよく私たちにも分かるようになったのだ。これもまたまことに貴重な「私たちの文学」だ。

以下でも文学学校修了生を軸にした雑誌が続くが、もうすこし新しいメンバーによる。『せる』第120号掲載の、若林亨「ファイヤー」は、五十歳の会社員・下田岩夫が散歩の途中、三百万円の入ったバッグを見つけるところからはじまる。下田には妻と娘がいるが、家庭内での影は薄く、彼には一方的に好意を持つている相手がいる。「管理職教育セミナー」で出会った由利恵で、彼女はそのセミナーで講師をしていたのだ。その三百万円をジャケットのポケットに入れて、下田は由利恵のマ

ンションを不意に訪れ、彼女から車をせがまれる……

道端で三百万円を見つめるような幸運も、下田をけつして自由にはしてくれず、むしろ相手の思惑にどンドン従わせてゆく。後半、下田は「ファイヤー」と何度か叫びそうになり、現に叫んだりするのだが、それは自縄自縛の關係に対する叫びのように響く。

同誌掲載の、吉川猛「旅の宿」には不思議な読後感がたただよう。

主人公・西川貴志は三十歳前後、高校を中退したあと、おそらくはいくつもの職場を転々として、いまはスパーで働いている。人間關係が不得手で、昨日も詰まらない失敗をしてかき、若い同僚からうとまれた。西川はそのスパーを二ヶ月働いただけで止め、快速急行で旅に出て、その終点で宿屋を探す。しかし、ようやく見つけた狭い民宿のような宿は、夜中になつて禍々しい異界の気配をたたよわせる……

作品はその翌朝、いったん宿を出た西川がもう一度宿に戻ると、すっかり様変わりしているところで終わるのだが、一夜の異界体験をつうじての西川のある種の再生が示唆されているだろう。

『雑記囃子』第27号にも力作が並んでいる。谷口俊哉「カカシノトモダチダレ」は、優れたホラーミステリーあるいはミステリーホ

ラーに仕上がっている。

冒頭、四人の女性「由紀」、「香」、「貴子」、「恵」が、それぞれに小学校の同窓会に向かっている。四人はかつてよく一緒に遊んだ仲だ。会場は昔の小学校。しかし、小学校についても四人のほかに誰もおらず、校舎にも同窓会の準備などにもされていない。四人はすでに廃校になっているような校舎のなかに入ってゆき、もうひとり自分たちのグループに「怜花」という女の子がいたことを思い出す。怜花はグループの一員でありながら、四人にずっと苛められていたのだった。

四人が学校を出ようとすると、すでに校舎の門は閉じられていて、彼女らは学校を出られなくなる。そこへ幽霊となったかの状態で、怜花が現われて、「カカシノトモダチダレ」という遊びを強いる。私たちの子どもころは「ダルマさんがころんだ」と口にしていた遊びである。怜花の霊によって呪い殺されそうになる四人だが、その過程で、四人がそれぞれの方ですでに死んでいることが明らかになる。由紀も香も貴子も恵も、じつは死者だったのだ。

こんな物語を、全篇緊迫感を持って書きとおす作者の力量に、私は敬服するしかない。同誌掲載の、福井絢子「繫がる糸」は、四国のいわゆるお遍路を背景に、三世代にまたがっての人間模様を丁寧を描いている。

主人公の由布子（ゆうこ）は、四十八歳。デザイン会社でデザイナーの仕事をしているが、最近では若手のデザイナーに押され気味。しかも夫の正輝は三ヶ月まえ、不意にマンションを出てゆき、LINEで離婚してくれただけ伝えてくる。由布子は二十九歳で妊娠したが流産し、その後、子どもはできないままという過去がある。

由布子はお遍路の途中で、七十歳を越えているだろう老夫婦と、二十歳の若者・小山人志と出会う。両者は由布子よりもさきに出会っていた仲である。そんなときに、正輝から彼女に子どもができたから急いで離婚してほしい、というLINEが入る。由布子の悲しみに対して、老夫婦と小山人志がそれぞれに遍路を行う背景が包み込むように作用する。小山は大学を中退し、生きる理由を見失っていて、老夫婦にはちょうど小山ぐらいの年齢で自死した息子がいたのだった。

こう書くといかにもお遍路もののような印象を与えてしまうかもしれないが、私のそういうまとめ方が悪いので、作者の筆致は安直な物語と思わせない十分な深みを持っている。同じく同誌掲載の、稲葉祥子「日本語練習帳——受身形／実は／ひらがなは、主人公・

林淑子（よしこ）が教えている日本語学校の教室を舞台に、日本語の難しさから、言葉が不意に発揮する暴力的な力、現在の国際情勢

にいたるまで、抱腹絶倒の文体でぐんぐん迫ってくる。

短篇三部連作といった構成なのだが、その第二部に相当する「実は」では、「実は私は『です』という日本語表現を覚える練習で、若く見える生徒が「実は私、二十九歳です」とか、ヒンズー教徒の生徒が「実は私、牛肉を食べました」とか、ことごとく懺悔のような例文を口にする。それに対して林先生自体も同様の衝動を抱えている。つまり、林淑子には林淑芬（シヨツフン）というもう一つの名前があって、台湾で台湾人の両親のもとに生まれ、五歳のときに日本に渡ってきたという設定である。林先生自身「実は私、日本人じゃないんです」という告白を、ぐっと堪えているのだった。

この作品では、グーグル翻訳の話がしきりに出てきて、さすがに現在の語学学校ではそうなのかと思う。そこにも、いろんな行き違いがあって、たとえば、三部作の最後「ひらがな」では、林先生が「うちはどこですか？」とまだ日本語がほとんどできない生徒に帰宅先をなげなく問いかける。するとそのグループでのロシア語翻訳を見た生徒は「ウクライナです」と悲しげに答える。もちろん、こういう行き違いは、グーグルや翻訳にだけ関わるのではなく、おたがいに関係し合うことの難しさそのものを示している。善意も容易

に悪意に転じてしまうのだ。

なお、同誌には昨年十二月に亡くなった遊雅仁（本多重重）の遺作「級長」が掲載されている。主人公・島本清が行きつけの居酒屋で、幼友達で小学校時代に級長をしていた岸宮耕平と昔語り闲聊。時間設定は二十世紀の最後、島本は「二十世紀を総括したい」などと言う。いわゆる団塊世代なのだ。話は高校時代にも属していた卓球クラブのことから、やがて島本が小学生のころからひそかに思いを抱いていた香月篤子という女性のことに移る。岸宮は父親が入院したときに看護士をしていた香月と思わず出会ったことを語り、そのときの彼女の献身的な姿を「人生の級長」と呼ぶ。最後にはその香月篤子が岸宮の現在の妻であるという落ちが付くのだが、「二十世紀の総括」という大きな話がひとり女性の姿に集約されるところに、遊雅仁の自分自身への問いかけが刻まれていると思う。

『飢餓祭』第49号掲載の、佐伯厚子「銀の滴」は、新しいコートに仕立て直される大島紬の反物を仲立ちにして、女同士の心の機微を描いた好短編。

主人公の幸子は六十三歳、父の三十三回忌を機に、父の遺していた大島紬の反物を与えられる。その扱いに悩んだ末、友人・翠の勧めにしたがって、同じく高校時代からの友人・春江に仕立て直しを依頼する。春江は主婦を

しながら洋裁教室へ通い、いまではプロ並みの腕前になっている。

しかし、幸子、翠、春江のあいだには、口にできないわだかまりがあった。四十年前、春江が妻のある上司と駆け落ちする直前、幸子は「奪ったらええやん」と春江をそそぐかすような言葉を吐いていた。おそらく苦勞したのであるう春江に対して、以来、幸子は罪悪感を持っている。一方、両親が離婚していた翠は、春江の駆け落ちに強く反対の気持ちがあったのだ。ときにはランチを一緒に食べ合うことがあっても、あれ以降の互いの思いは封印している関係である。それぞれの思いが反物の仕立て直しのなかで少しずつ反芻されてゆく…。

仮縫い、補正、本縫いという仕立て直しのプロセスに感して幸子が「人生もそうできたらよかったのに」と呟いたのに対して、「人生はそんなわけにはいかへん」と答える春江の言葉が厳しく響く。

同誌に掲載の、森口順子「記憶の形」は、高校の文芸部の話を中心に、その後日譚までを、主人公・岩崎立子（りつこ）の視点で描いている。

岩崎は同級生の高木日奈子に誘われて文芸部に入ると、そこで小学校時代に一緒だった辻本隆文と出会う。辻本は病弱でいながら負けん気が強い一方で、宮沢賢治の詩集を読ん

でいたりしたのだった。さらにそこに他校の文芸部の安田瑞穂がくわわって四人組ができあがる。さらに、辻本が中心になって同人誌の刊行にまでいたる。高校卒業後も同人誌は刊行されるが、それぞれが二十歳になったとき、辻本は同人を解散し、二十四歳で病死してしまう…。

高校時代は一九六〇年代後半なのだが、そのまま現在と地続きのように感じられる。それだけリアルに描かれているのだ。作中にそれぞれの詩が引用されていることもその印象を強めている。後半に辻本がノートに書き残していた小説のような断片が引かれているが、それみたいへん魅力的だ。

『あべの文学』第34号掲載の、森田浩平「帰省」は、二十年前の事件をめぐる好短編。

作品は、小村竜也が二十年前に故郷の漁村に帰るところからはじまる。父の三十三回忌の法事のためだが、二十年も帰省しなかったのは、悪い思い出があるからだ。小学校時代からの幼友だちだった竹田幹夫が二十年前に海で溺死したのだ。しかも竹田が、同じく幼友だちで網元の娘だった美弥子をめぐって、小村に競泳を挑んだ結果だった。小村は美弥子とも再会し、あの事件について思い巡らす。小村ほどは水泳が得意でなかった竹田がなぜ競泳などを望んだのか。そもそも竹田はおよそ競争が大嫌いな性質だった。ひよっとする

とあれは一種の自殺だったのではないか。

美弥子が小村に好意を抱いているのを竹田が察知していて、そのことに鈍感な小村と美弥子結びつけようという意図が竹田にあったことは示唆されているが、ほんとうのところは分からない。丁寧に書かれた作品だが、いかんせん十頁である。もうすこし膨らませてあってもいいのでは、と思う。

『組香』第7号には、中小路そら「髪結びお袖」が掲載されている。昨年七月に死去した作者の遺稿である。

明治三十一年の誕生から売春防止法が制定される昭和三十三年までの日々が、「髪結びお袖」となる「あたい」の視点で綴られている。冒頭、「あたい」は生まれて五日目に歩きだし、美しい娘になったとあるので、一種ファンタジックな設定なのだが、同時に歴史的な考証、髪結いに関する用語などがやたら詳しく記されている。全体が佐賀県の九州言葉らしき話体で綴られているのも特徴的だ。「あたい」は小学生のときに野犬に鼻を齧られて以来「鼻なし」という差別対象となるところからは、日本の明治から昭和の時代を一種のマイノリティの視点でたどるといふことも作者の意図だったのだと思われる。

今回『VIKING』は四冊届いているが、同誌861号掲載の、大西咲子「風のたより二十三 私に似た人」が傑出してゐる。

「私」は久しぶりに東京に出て、友人と会おうとしている。しかし、ホテルのチェックアウトは朝の九時、友人との待ち合わせは午後二時。空いた五時間をどう使うかと考えて「私」は上野公園を訪れ、四十年、五十年前によく目にしてきた上野の森のなかに、すでに亡くなった多くのひとびとの記憶をつぎつぎと甦らせてゆく。東京文化会館は子どものときからはじめたバレエとその先生の思い出を、東京都立美術館は百号の大きなキャンバスを一緒に運ばせた、画家志望の佐立潤子の姿を呼び起こすといった具合である。甘い思い出よりもむしろ苦い記憶のほうが多い。

そして、そういうひとびと、「私に似た人」を描く作者の文体がじつに落ち着いていて、丁寧で深い。以前は情報量が過多で少々荒っぽさが目立ち、そこが魅力的でもあった作者とは打って変わっている。

ちなみに「風のたより」という通しタイトルでこのところ作者は作品を発表しているが、必ずしも連作ではない。実際、同誌第859号掲載の「風のたより二十一 下絃の月は輝いて」で作者は、認知症の出かけている老婆・山口キヨを介護する日々を、娘・聡子の視点で半ばユーモラスに描いている。「風のたより」というのは、自分に届いた声と言葉、あるいは自分の届ける声と言葉の行き交いといったイメージが込められているのだろう。

『とぼす』第66号掲載の、長瀬葉子「夕風まで」は、若いときから振りまわされようだった女友だち・鳥居美和との関係を、七十七歳を過ぎた岸部沙希子の視点で振り返って描いている。

冒頭、美和から喪中はがきが届く。美和の夫が亡くなったのだ。そこから美和との関係が綴られてゆく。子ども同士が野球のリトルリーグに参加していて二人は知り合ったのだが、以来、美和は不倫のアリバイを頼んできたり、借金を申し出たり、沙希子は迷惑をかけられっぱなしだった。沙希子のほうはその後離婚して再婚するが、久しぶりに電話をかけてきた美和は八年前に夫が事故で大怪我をしてから、夫との関係が親密になっていった様子を語る。沙希子の抱えているかもしれない美和への不満など、どこ吹く風。しかし、沙希子はそんな美和にけっして不満を抱いてるだけではない。むしろ、昔の美和のよういてほしいとすら願っているようだ。

『カム』第20号掲載の、宮内はと子「みわの光」も類似した傾向の作品で、偶然ながらこちらの迷惑な幼馴染みの名は「長井みわ」。四十歳を過ぎて久々に出会っても「わたしにとつて不快な関係は変わらない。それでいてタイトルは「みわの光」。そこには「夕風まで」と同様の作者の思いが感じられる気が私はする。